

イギリスの標準発音とは

—Estuary English が持つ標準発音への新たな可能性—

150127 大木 碩生

序章

現在、英語は世界の公用語として世界中の人々をつないでいる。その英語の祖国とも言えるイギリスには様々な英語の発音が存在するが、その中でもとりわけ標準的な発音だと考えられているのが Received Pronunciation(RP)である。この RP と呼ばれる発音は BBC(British Broadcasting Corporation)や上流階級の人々の間で用いられることが多く、そのような背景から RP を話せる人は相手に対して上品というイメージを与えることができる。

RP の前身は 1870 年代である。当時のエリート教育において、パブリックスクールに進学する者は地域発音ではなく、学校独自の発音を話すよう求められた。その発音こそが RP の前身である Public School Pronunciation(PSP)であった。この発音を学ぶことができるのは主に上流階級や上層中産階級の子供たちに限定されていたことから、現在においても RP の話者は上流階級を中心に分布している。ここで問題なのが RP の話者数が極端に少ないということである。現在、イギリスで RP を話すことができる人々の数は全人口の 2%だと言われている。つまり 98%は RP を全く、または完全には話せないということになるわけだが、こうした状況が続いていることもあり、イギリスでは話す英語への考え方が変わりつつある。例えば、イギリスのサッカー選手だった David Beckham は自らの英語の発音を変化させたが、これは労働者階級の話す発音に対するイギリス人の評価が低かったことが原因と考えられる。一方で、1997 年から 2007 年までイギリスの首相を務めた Tony Blair は演説や討論の場において、出身地の発音や、労働者階級が主に用いる発音を話すことがあった。元々労働者階級が使う発音は低俗、下品という評価を与えられることが多く、話す人は馬鹿にされる傾向にあったが、ブレア首相は人々との距離を近くするためにその発音を選択した。このように発音への考え方が変わっていく事で、地域発音の重要性が高まっていることに加え、RP に与えられている標準的という評価に疑問を感じる人々も現れ始めた。そして今現在 Estuary English (EE) 呼ばれる地域発音が RP が標準発音であるということに疑問を持ち始めた人々の間で注目を集めている。

そこで本論文では、現代のイギリスが RP 成立当時と比較して、どのように変化しているかを調査したうえで、EE がイギリスの新たな標準発音になる可能性が存在するかどうかを探求することを主題とする。これにより、地域発音が注目を集めるようになった現在のイギリスが RP 成立当時と比較して具体的に何がどう変化したのかを調査することを本論文の目的とする。

第1章においては、イギリスの階級制度とRPの成り立ちと現状から成立当時と現在のRPに対する考え方の違いを明らかにしていく。第1節では、イギリスの階級社会の歴史を調査し、存在する階級の種類の説明を行ったうえで、イギリスにおける階級とは何かについて論じる。第2節ではRPの歴史を調査し、RPが成立した当時の考え方を考察したうえで、現在のRPの現状を調査し、そこから現在の人々のRPに対する考え方を考察する。そして成立当時の考え方と現在の考え方を比較して、どのように考え方が変化したかを明らかにしていく。

第2章においては、現代のイギリスが階級変動の現状がどうなっているかを調査したうえで、現代に求められる標準発音の要素を確認していく。第1節では、イギリスの階級変動の現状がどのように変化しているかを調査するための指標である社会的流動性の定義を確認する。第2節と第3節においては教育と職という観点から、階級変動の現状を明らかにしたうえで、現状を作り出している要因を考察する。第4節では、第2節と第3節で得られた階級変動の現状を踏まえたうえで、人々のRPと地域発音に対する評価を明らかにし、比較していく事で現代における標準発音に必要な要素を考察する。

第3章においては、標準発音のEEとしての可能性を特徴の面と地理的な面という2つの部分から明らかにしていく。第1節では、標準発音に必要な要素とEEの特徴を比較したうえで、特徴の面からEEに標準発音になりうるかどうか検討していく。第2節においては、他の地域発音と明確に異なると言われていたEEの発音を調査する。第3節においては、標準発音は人々に知られている事も重要な要素と考えられるため、EEが出身地域にとどまらず様々な地域に拡大しているかどうかを明らかにしたうえで、EEに標準発音としての可能性が存在するかどうかを決定する。

1. 階級制度と RP

本章では、イギリスに厳格な階級制度が存在していることを踏まえたうえで、イギリスで標準的な発音とされている RP がどのように成立したかを調査し、現在の人々が RP のことをどう考えているかを考察していく。第 1 節では、階級制度の成立した背景を明らかにしたうえで、この階級制度が英語の発音とどのような関係があるかを分析し、第 2 節においては階級制度と英語発音の関係を踏まえたうえで、RP がどのように成立したかを調査し、また現代のイギリス人の RP に対する考えと RP 成立当時の考えを比較して現在の RP がどのような発音なのかを明らかにしていく。

1-1 イギリスに存在する階級社会の仕組み

イギリスには厳格な階級制度が存在しており、職業や学歴、自分の話す英語の発音から階級が判断される。本論文においてはイギリス英語を扱うことから、イギリスにおける階級制度が重要であると考え、本節においては、階級制度がどのように成立したかを調査したうえで、階級の種類の特徴を分析し、イギリスでは階級を分ける上でいくつか指標が存在し、英語の発音がその指標として存在しているかどうかを明らかにしていく。

歴史学者のキャナダイン (2008) が、イギリスの階級制度の始まりは 18 世紀と言われており、当時は階級に対して 3 つの考え方が存在したと述べていることから、当時はまだ階級の意味が曖昧だったことが伺える。1 つ目の考え方がヒエラルキーでの階級区分である。この階級区分は文字通り社会的順位に応じて、1 人ずつ階級を区分するというシステムだったが、1 人ずつ区分するためには無数の数の階級が必要となるため、集団的な区分の策定が求められるようになった。

そこで考えられた階級区分が三層モデルと二極分解という 2 つのモデルであった。キャナダインによれば、三層モデルは社会は 3 つの集団に分類されているという考え方であり、一方で、二極分解は階級を極端に 2 つに分けるというもので、例としては「極端な金持ち」と「極端な貧乏人」や「貴族とジェントリー」と「卑しい生活を送る人々の群れ」というように上下をしっかりと分けるモデルであり、中産階級を考慮する三層モデルとは対を成す考え方だった。三層モデルの出現が 18 世紀ということを見ると、中産階級という考え方の出現は 18 世紀が最初であり、また現在のイギリスでは三層モデルが採用されていることから、中産階級という考え方が現在のイギリスの階級制度に大きな影響を与えたと考えられる。

19 世紀になって、三層モデルと二極分解のどちらが良いかという論争に大きな影響を与える産業革命が起きる。産業革命が起こることでまず人口の上昇が顕著となった。キャナダインによれば、イングランドでは 1780 年から 1836 年にかけて人口は 2 倍にまで増加し、Scotland では 1801 年から 1831 年にかけて 50% 上昇しており、このことから産業革命は都市の発展を促進した出来事であることが分かる。この都市が発展したという事実は中産階級の広がりを示しているとも考えられ、根拠としてはマンチェスターやリヴァプールの発

展が挙げられる。マンチェスターやリヴァプールは現在工業都市となっており、そこに住む人々の多くが労働者階級に属しているが、キャナダインによればこれらの都市は産業革命によって急速に膨張したということから産業革命が労働者階級の形成に関わっていると考えられる。

三層モデルを固定化させた要因として 1832 年の選挙法改正案にあると考えられる。これは中産階級の形成の要因でもありと考えられており、その根拠としては選挙法改正案の内容にあると考えられる。選挙法改正案の内容として歴史学者の村岡と川北（2003）は、都市選挙区においては 10 ポンド以上の家屋・店舗を所有する者に選挙権を与え、州選挙区においては 10 ポンド以上の土地所有者と年価格 50 ポンド以上の借地農に選挙権を与えたと述べており、ここから比較的金銭的余裕のある中産階級は選挙に参加できる一方で、貧困にあえいでいた労働者階級の人々は選挙に参加できなかつたと考えられる。つまり選挙に参加できるかできないかという基準が中産階級と労働者階級を分ける基準となつたと考えることができる。また村岡と川北はこの改正案の影響で、投票者が 16 万人から 96 万人に増加したと述べており、ここから中産階級の人々が社会に現れ始めたことが伺える。

19 世紀に上流階級と中産階級と労働者階級の 3 つの階級に人々が分けられるようになったことを明らかにしたが、この 3 つの階級にはそれぞれ特徴が存在する。地域経済学者の石川（1993）が上流階級の人々は英国全人口の 2%程度しかいないと述べており、彼らは RP の話者であることを踏まえると、RP の話者数が極端に少ないのは上流階級が少ないという要因が関わっていると考えられる。また上流階級の間でも種類が存在し、それは世襲貴族と一代貴族というものである。一代貴族は、石川が、生前一代に限って貴族と認められ、上院に席を連ねることができるようになった平民のことを指しており、一代貴族の爵位は本人が死ねば消滅すると述べており、一代貴族の例として Margaret Thatcher が挙げられている。この一代貴族は上流階級でありながら世襲貴族の人々からは上流階級とは考えられておらず、Thatcher の場合は中産階級と見られると石川が述べていることから、イギリスにおいては出生時の階級が重要となると共に、上流階級が他階級に対して閉鎖的であることが考えられる。

中産階級にも Upper middle(上層中産階級)と Middle middle (中層中産階級)と Lower middle(低層中産階級)という 3 つの種類が存在する。上層中産階級は上流階級を除けば、イギリスの中で最上位に位置する階級であり、教育水準や生活水準も豊かな階級である。特に教育水準においては、パブリックスクールに子供を通わせる家庭が多いことから上流階級に次いで整っていると考えることができる。また石川が上層中産階級の人々は言葉遣いに非常に気を使い、ゴルフや狩猟などの上流階級の趣味を真似しながら、不相応な生活を目指してきた一方で、郊外に住んでいる人々を毛嫌いする傾向にあると述べていることから、上流階級に羨望のまなざしを向ける一方で、上流階級と同様に格下の階級には閉鎖的であることが伺える。

中層中産階級の人々は現代においては上層中産階級同様に大学を卒業することが多く、

職業では地方公務員や会計士、事務弁護士、中学校教師といった専門職に就く人々が多い。大学を卒業するとはいっても、ケンブリッジ大学やオックスブリッジ大学に進む人は上流階級や上層中産階級と比較するとやはり少ない。London 市内では、中層中産階級を満足させる住宅地に家を持つことが不可能という事情が存在すると石川は述べていることから、金銭的余裕はやはり上 2 つの階級と比べて少ないことが伺える。つまり、金銭的余裕がないため授業料が高価なパブリックスクールなどに通わせることが出来ないという現状が中層中産階級の人々のケンブリッジ大学やオックスフォード大学への進学を阻んでいると考えられる。

低層中産階級の人々は中層中産階級と同様に大学を卒業し、職業においては保険会社と銀行の事務員や企業の下級官吏職に就く場合が多いと石川が述べている。この階級は労働者階級の 1 つ上ということもあり、労働者階級と近い存在と言うこともできる。例えば、この階級に属していた Thatcher は自らが発する訛りに悩まされるが多かったと言われており、これは労働者階級でも当てはまる事例である。現代においては労働者階級から下層中産階級に成り上がる人や下層中産階級から労働者階級に下がる人が増加していることから昔と比較して下層中産階級と労働者階級の距離が縮まっていることが伺える。距離が縮まったことから、下層中産階級の人々は労働者階級との境界線を以前にも増して求めるようになったと考えられる。

労働者階級も中産階級と同様に上層と中層と下層の 3 つの種類に分けられている。労働者階級に属する人々は他階級の人々を「them」と呼び、一方で自分たちのことを「us」と呼ぶことで自分たちと他階級に属する人々を引き離す傾向にあると石川が述べており、このことから労働者階級は排他的であると考えられる。一方で石川は 70 年代初めにかけて、平等主義的な労働者階級は美しい式の革命が進むにつれて、排他的という特徴が薄まりつつあるとも述べており、現代においては労働者階級が中産階級に比較的上がりやすくなっている事から、排他的という特徴が更に陰りを見せていると考えられる。生活に関しては、隣人や地域とのつながりが他階級と比較して強いと石川が述べており、このことから労働者階級の人々が自分の出身地の言葉などに強いこだわりを見せるのは人や地域との繋がり

の強さにあると考えられる。

政治学者である河合（1983）がイギリスにおける階級の第 1 の指標は職業であり、第 2 の指標は教育、第 3 の指標は英語の話し方であると述べている事から、階級を判断するうえで英語の話し方が重要な指標となっていると言える。英語の話し方が階級の判断指標となっている例として世界的にも有名なサッカー選手である David Beckham の英語が挙げられる。社会学者である Sofia Dahou と Jasmin Hamlin(2005)は Beckham の英語は労働者階級特有の発音から世評の高い発音に変化したと述べており、これにより Beckham は自らの階級を向上させたとも述べている。この背景には Beckham が労働者階級出身であり、労働者階級特有の英語の発音の仕方であることから、人々から馬鹿にされることが多かったことが存在していると考えられる。Beckham の事例を考慮すると、英語の話し方が階級

判断の指標になると言える。

本節ではイギリスには厳格な階級制度が存在しており、主に階級は上流、中産、労働者の3つに分けられており、これら3つの階級を分ける上で、指標として職業や教育の他に英語の発音が挙げられることを確認した。英語の発音が階級判断に関わることを踏まえたうえで、次節においてはRPがどのように成立したか、また現代ではRPがどのように考えられているかを明らかにしていく。

1-2 RPの歴史と現状

前節ではイギリスにおける階級制度の成り立ちと種類を調査し、厳格な階級制度がイギリスには存在することを論じた。本節においては、イギリスにおいて標準とされているRPという発音がどのように成立していったのかを辿り、イギリスにおける標準発音の考え方を考察し、一方でRPの現状を調査し、過去から現在にかけてRPに対する考え方がどのように変化したのかを明らかにしていく。

RPの成り立ちには上流階級の教育が大きく関わっているため、上流階級の教育形態をまず説明していく。上流階級の子どもは8歳から13歳にかけてプレパトリースクールという学校に通学することになる。13歳になると進学のためのテストを受験し、そこで成績を収めた学生がパブリックスクールに入学することができる。パブリックスクールは寄宿制の学校であり、生徒たちは13歳から18歳の期間を寄宿で過ごすことになるのだが、この理由としては、生徒たちから地方発音を消すという目的が考えられる。地方発音を消すことによってRPを完全に学生に定着させるという目的があったのである。

まず過去の標準発音の要素を説明する前に、標準という概念がどのように構築されていたかを説明する。イギリスで標準発音という考えが生まれたのは15世紀のことであったが、当時は現在の標準発音とは違い、法廷や公的な書類に用いられる書き言葉のことを標準発音と呼んでいた。標準発音が実際に考え始められたのは17世紀後半である。言語学者であるRaymond Hickey(2012)によれば、1685年に発音専門家であるChristopher Cooperが当時のLondonの発音を最良発音として認めたと述べており、この理由としてLondonの都市としての優位性を挙げている。当時のLondonは事実他の町よりも群を抜いて非常に規模が大きく、1600年時点で、2番目に規模の大きいノリッジの約17倍もの規模を有していた。また全人口の10分の1がLondonに存在していたということでここからLondonの地位が非常に高かったことが分かる。

イギリス諸島の各地から成功を求めて多くの人々がLondonにやってくるようになり、16世紀に5万人だった人口は18世紀には約100万人になった。規模としてもヨーロッパ最大の都市にまで上り詰めたことによりその地位を確固たるものにしたLondonにおいて発音の重要性がさらに増すようになった。18世紀後半になるとその傾向が顕著に表れ、標準発音を子供に学ばせるための全寮制教育を多くの親が望んだ。1870年以降になってやっと親が望む全寮制教育が行われるようになり、子どもたちが7,8歳から17、18歳にかけて

親元を離れて教育を受ける体制が出来上がった。パブリックスクールでの10年間で主に上流階級出身の子どもたちは出身地域の発音を忘れて、最良とされる発音を用いるよう教育された。この発音が後のRPであり、学生たちはこの発音を上手く扱えない先生をいじめることもあったと教育学者のジョン・ハニー（2003）が述べているように、当時はパブリックスクール内の発音を一番上に置いた序列が成り立っていたのである。以上のことから当時の標準という概念には階級や権力といった要素が関わっていると考えられる。

1900年代に入ると教育だけにとどまっていたRPという存在がマスメディアを通して、イギリス中に伝えられるようになる。ラジオやテレビのアナウンサーが使う発音はRPが殆どであり、地域発音が表に出現することは殆どなかった。これは1992年に設立された公共放送機関であるBBCにも当てはまっている。これに加えて、BBCは出演者にタキシードの着用を義務付けた。この規範のねらい目としては、RPとBBCのイメージアップが目的であったと考えられる。このようにして教育制度やメディアを通してRPはイギリス中に広まり、人々はRPを高貴で教養ある発音だと認識するようになった。

このように歴史を辿っていくと、RPが人々から高い評価を受けていることが伺えるが、現在の人々のRPに対する考え方を次に明らかにしていく。言語学者のPeter Roach(2004)によれば、RPの現状は以下のようになっている：

- 1：North IrelandやScotland、Walesに住む人々でRPを使用している人々は非常に少ないことから、RPを英国の代表的な発音とするのは間違いである
- 2：RPの話者の大半がパブリックスクールで教育を受けた上流階級か中産階級の人々である。パブリックスクールに通わなくとも、RPを習得することは可能だが、地方発音が混ざるのは避けられないため、純粋なRPを話しているとは言えない。
- 3：RPの使用者は大半が南イングランドに在住している。
- 4：RPは現在もBBCの公用語として使用されているが、BBCワールドサービスにおいては、他国の発音が使用される回数が増加してきており、報道機関の公用語としてのRPの立場が危うくなってきている。

1番目の状況について、これにはRP以外に公用語として扱われる発音が存在することが原因と考えられる。ScotlandではScotland英語が主流であり、WalesやNorth Irelandにおいても同じような状況であることから、わざわざ苦労してまでRPを学ぶ必要がないという考えが人々に根付いていると考えられる。

2番目の状況について、RPを完全に習得するにはパブリックスクールに通う必要があるということと地方発音を忘れる難しさを説明している。この状況から地方発音を無くすためには子供の頃から、パブリックスクールで教育を受ける必要があると考えられるが、パブリックスクールで教育を受けるには膨大な資金が必要になるのである。パブリックスクールの授業料は1年で£10,000から£20,000が必要になり、この支払がおよそ10年間必要

になるということから裕福な家庭でないとパブリックスクールに子供を通わせることが出来ないのである。このことから RP を学べる生徒が裕福な家庭に住む子供に制限されてしまい、RP の話者が増加しないのである。

3 番目の状況について、南イングランドに RP の話者が集まっている理由としては南イングランドが RP の発祥地であることが考えられる。一方で、South England に RP の話者の殆どが存在するということは North England には RP の話者が殆ど存在しないとも考えることもできる。RP はイングランドにおいても南部にのみ留まっていることから、標準発音としての RP の影響力が低下していると考えられる。

4 番目の状況について、アメリカやオーストラリアのような他国の発音が使用されるようになったということから、グローバル化が進行していることが要因となっていると考えられる。第二次世界大戦以降、イギリスを含む先進国は多くの国々に関わりを持つようになったことから英語も国によって適切な形にしなくてはならないという問題が生じたと考えられるが、BBC が RP を他国の発音に変えたことが RP の考え方に大きな影響を与えたのは、RP の歴史における BBC の役割から見れば明白である。

また上述の 4 つの状況に加えて、上流階級の影響力が小さくなったことが要因と考えられる。以前は政治にも関わり、土地からの収入を得ていたことから、一般の人々に自らの権力を見せつける機会が多く存在したが、現在は土地から収入を得るのではなく、むしろ管理費や税金などでお金を支払う立場になり、政治においても、貴族院で議員になれるのは世襲貴族のみで、議席数も 92 席に限定されてしまっている事から、社会に対する影響力が小さくなったと言える。

上述の 5 つの状況から、RP に対する現在の人々の考え方は大きく変化していることが伺える。過去は RP を頂点とした階級判断がなされていたが、現在の Scotland や Wales での事例から、人々は自らの話したい発音を選択し、わざわざ RP に固執することはないという態度が垣間見える。

RP がどのように成立したかを調査したことで、イギリスの標準発音が階級や権威を人々に示す形で広められていき、RP も同様にメディアや 1800 年代の教育制度を通して、その権威や威信が人々に伝わっていった。ここから当時の人々にとって、RP は絶大的なものだったと考えられる。一方で現在の RP の現状を考慮すると、RP が当時と比較してそこまで大きく影響を与える存在だとは考えられていない。ここから RP は過去から現在にかけて影響力を狭めたと言えることができる。また RP の影響力が狭まることにより、逆に人々は自分たちの出身地域の発音を大切にしようとする人も増加していると考えられる。RP の影響力が狭まったことにより、発音という観点においては、階級意識が RP 成立当時と比較して薄まっていると考えられる。

本章ではイギリスにおける階級制度と英語の発音が相関している事と英国での標準発音とされている RP の過去と現在を確認していった。イギリスの階級制度は非常に厳格であり、職業や教育、英語の発音といった要素が考慮されて階級が決まることを 1 節で確認した。2

節では、最も階級が高いと考えられている RP が 1900 年代前半においては、絶対的な発音だと考えられていたが、現代において RP は以前ほど大きな影響力を持っておらず、このような状況になっている要因として上流階級の権力の縮小や多額の金が必要になることを挙げた。RP が以前ほど大きな影響力を持っていない一方で、台頭するとすればどのような発音なのかを確認するためには現在のイギリスの状況を確認する必要があると考えられるため、次章では、イギリスの状況を踏まえたうえで、どのような発音が求められているかを論じることとする。

2 イギリスの社会的流動性と階級変動の現状

前章ではイギリスで階級を判断するには話す言葉が重要になることを論じた・本章では、イギリスに存在する社会的流動性を説明し、それが今のイギリスの言語事情にどのような影響を与えるのかを考察した上で、今のイギリスの標準発音に必要な要素とは何かを明らかにしていく。

2-1 イギリスにおける社会的流動性とは

前章では、RP が以前ほど大きな影響力を持っていないことの理由の1つとして上流階級の影響力が低下したことを挙げたが、上流階級の影響力が低下したことによりイギリス人の階級に対する考え方も変化していると考えられる。英語の発音は階級と密接な関係を持っていることから、イギリスの階級変動の現状について把握する必要があると考えられる。本節においては、イギリスの階級変動の現状を把握するうえで有用な指標となる社会的流動性について確認していく。

法学者である新井（2001）は、イギリスの元首相である **Margaret Thatcher** が階級の無い社会を階級が重要視されない社会という意味で用いたと述べており、ここから **Thatcher** が階級が重要視されない社会、つまりイギリスの平等化に注力したと考えられる。**Thatcher** の次にイギリスの首相に就任した **John Major** 元イギリス首相も **Thatcher** の階級の無い社会という言葉全ての人が中産階級に属する社会という意味で考え、階級の無い社会を理想に掲げたと新井は述べており、ここから全ての人々が中産階級に属することで階級意識を人々の中から無くそうという **Major** の思惑が伺える。また **Major** の中産階級に人々を属する社会を構築するという理想は、イギリスの人々の階級が変動することを前提とした考えであり、現代のイギリスでは過去のイギリスと比較して階級の変動が起りやすいことが考えられる。

実際に階級の変動が起きているかどうかを調査するうえで社会的流動性という有用な指標が存在する。この社会的流動性という指標について、社会的流動性の向上を目的とした慈善事業団体である **Sutton Trust** (2017)は、社会的流動性は収入や階級を通して判断されると述べており、このことから社会的流動性は収入と階級という観点から判断されることが分かる。本章においては、階級変動の現状を把握することが目的のため、階級に着目していく。**Sutton Trust**は、階級から見た社会的流動性はある人の階級がその人の両親と比較して変化しているかどうかを明かす調査方法であると述べていることから、ある人の階級が両親と比較して変化した場合、社会的流動性は高まり、変化しなかった場合、社会的流動性は低下することが分かる。つまり社会的流動性が高まるということは階級変動が起きやすい世の中であるということになる。

階級は教育と職業に強い関係を持っていることから、教育と職業という観点から社会的流動性を検討する必要があると考えられる。階級から見た社会的流動性は階級が変化したかどうかを調査していることから、教育や職から社会的流動性を考える場合には、階級が変わ

る地点を明らかにする必要がある。例えば、職を考慮した場合、どのような職に就けば階級が変動するのかということを決定するということである。階級が変化する境界線を決定したうえで、教育における社会的流動性と職における社会的流動性がどうなっているかを調査し、流動性の低下や高騰がなぜ起こったのかを考えることで、現在のイギリスの階級変動の現状を把握することができると考えられる。

本節では、イギリスの階級変動の現状を把握するうえで有用な指標である社会的流動性の定義の確認を行ったうえで、社会的流動性は階級と収入という観点から判断されることを明らかにした。また階級は教育や職業と強い関係を持っていることから、教育と職業という2つの場合に分けて社会的流動性を考える必要があると考えられる。

2-2 教育における社会的流動性と平等化

前節ではイギリスにおける社会的流動性の定義の確認を行ったうえで、階級が教育や職業と強い関係を持っていることから、この2つの要素を考慮して、社会的流動性を考える必要があることを確認した。本節においては、教育における社会的流動性について調査したうえで、流動性が高くなる、または低くなる理由について検討していく。

まずはイギリスの教育制度の説明をする。イギリスの義務教育は5歳から16歳までと制度化されており、5歳から11歳までのいわゆる初等教育の段階を **Primary Education** と呼び、11歳から16歳にかけての中等教育の段階を **Secondary Education** と呼び、義務教育はここで終了する。義務教育を修了し、なおも高い教育を受けようと大学への進学を志す者は16歳から18歳にかけて **Sixth Form College** と呼ばれている学校で **A-Level** 試験という大学試験のための勉強に専念し、その試験において十分な成績が取れた者のみが大学へ進学し、**Higher Education** を受けることを許可されるというシステムとなっている。

1988年教育改革法においてすべての義務教育段階の子供たちの学力の向上させることを目的にした全国カリキュラムの策定と全国一斉の学力試験が導入が行われた。義務教育期間を7歳・11歳・14歳・16歳の4つの段階に分け、それぞれの段階においてテストが行われることになっている。人文学者の岡山ら（2001）が、16歳の頃に行われる **General Certificate of Secondary Education(GCSE)** と呼ばれる義務教育修了試験は全ての学生が受験するように義務づけられており、選択できる試験の科目は数学や英語などの主要科目に加えて、デザイン工芸や美術などの合計で35科目以上の科目が存在し、受験した科目の得点に応じて、生徒たちの学力向上に向けた指導に当たると述べていることから、**GCSE** が受験者の後の進路に大きく影響を及ぼしてくることは明白である。例えば、英語や数学といった伝統的科目の得点が高い学生は大学への進学を奨励される一方で、音楽や美術などの芸術科目の得点が高い学生は自然に芸術科目の得点向上に焦点を合わせた指導を受けることになる。

また **GCSE** や **A-Level** 試験の他に **National Vocational Qualifications** と呼ばれる国家試験が存在する。**NVQs** はより有利な、高収入な職業に就きたいと考える人々を対象にした

職業資格試験であり、16歳以上であればだれでも試験を受けることができることから、極端に言えば、この試験で高得点を取得することで大学を卒業しなくとも管理職などの階級の高い職に就くことが可能と考えられる。またこの試験はGCSEやA-Level試験との相関関係がある

大学院など		NVQ5	
高等教育 第1学位		NVQ4	
2+GCE Aレベル	Advance GNVQ	NVQ3	
4-5 GCSE 上級グレード	Intermediate GNVQ	NVQ2	
4-5 GCSE 下級グレード	Foundation GNVQ	NVQ1	
学位資格	一般職業資格	職業に特化した資格	

図1 GCSE・A-Level試験・NVQsの相関関係

(出典 独立行政法人労働政策・研究機構 原典 ヒュー・ウィッタカ(2003) P67)

NVQsはレベル1からレベル5まで存在しており、レベル1は非熟練職の基礎技能、レベル2は非熟練に相当するもの、レベル3は技術職・熟練工・工芸職・監督職に相当するもの、レベル4は技術職・下級管理職に相当するもの、レベル5は専門職・上級管理職に相当するものとされているが、NVQsのレベルを考慮して図1を見てみると、大学卒業以降の職業の階級が主に労働者階級が就く職業から主に中産階級の人々が就く職業に移行していることが分かる。このことから大学への進学は階級の上昇と関わっていると考えられる。

イギリスの大学進学率は1960年代以前までは約20万人と全人口の5%にも満たない状況にあったが、1990年代になると学生数は160万人にまで急上昇し、現在はおよそ232万人が大学に進学していることから、教育における社会的流動性が高くなる様相を催していることが伺える。この教育における社会的流動性の上昇に関して、考えられる原因が3つ挙げられる。

1つ目の原因は大学の数が増加したことである。岡山が「1992年に制定された教育法によって、それまで高等専門学校(Polytechnics)と呼ばれていた41校が大学に昇格し、1997年には大学の総数が89になった」(127)と述べており、実際に1992年以前と以降とは大幅に大学進学率が異なる。1980年代は15パーセント程度に収まっていた一方で、1992年以降、進学率はおよそ30パーセントにまで急上昇したことから、学生数がおおよそ2倍増加したことが分かる。現在のイギリスにおいては大学の数が20年前からおおよそ50校増加して136校となっており、学生数も大学の増加に応じて増加していることから、大学の数の増加と大衆化は大きな因果関係にあると考えられる。

2つ目の原因はイギリスの奨学金制度にあると考えられる。現在の奨学金制度は授業料と生活費の2つに分かれており、実家暮らしの学生は最大で約£16,000の援助を毎年受けることが出来、一人暮らしの学生は最大で約£20,000の援助を毎年受けることができるという非常に手厚い支援体制が確立されており、またこの援助の額は学生の経済環境に合わせて行

われるため、平等に学生に進学の機会が与えられていることが分かる。このように手厚い援助体制が設けられている背景には大学の大衆化が関係しており、かつてイギリスの大学授業料や生活費はすべて政府の負担であったことから、学生は無償で授業を受けることが出来ていたが、大学の増加による大学進学率の上昇によって、政府の予算が圧迫されてしまうことに加え、学生数の増加によってイギリスの高レベルな教育水準を保つことが困難になりつつあったため、1996年に当時のイギリス首相であるメイジャーがデアリング委員会と呼ばれる諮問委員会を設置した。デアリング委員会では大学の財政問題が主眼に置かれて話し合われた結果、経済環境に合わせた授業料の徴収と経済的支援体制の確立が提言されたことにより現在の奨学金制度が成立したと考えられる。

3つ目の要因は **Secondary Education** の整備だと考えられる。まず最初に **Secondary Education** の中身を説明していく。現在のイギリスの **Secondary Education** は、大学進学を目的とした **Grammar school** と就職を目的とした **Modern school**、そして進学を目指す人と就職を目指す人が一緒になる **Comprehensive school** という3つの学校に分けることができる。現在最もイギリスで数の多い学校が **Comprehensive school** であるが、この学校は1970年代から1990年代にかけて急増したことから、現代におけるイギリスの社会的流動性や大学進学率と何らかの関係があると考えられる。

まず **Comprehensive school** が増加した所以だが、教育における階級格差が原因だと考えられる。イギリスの過去の **Secondary Education** は **Grammar school**、**Modern school** と最後に **Technical school** という技術者育成のための学校の3つの学校で構成されており、**Comprehensive school** は当時あまり主流ではなかった。この3つの学校の振り分けは学生が11歳の頃に行われるテストによって決まり、教育学者の後藤（1966）によれば、「地域によって各コースの定員比率は異なるが、平均すると、試験成績最上位20%がグラマースクールに、次の5%がテクニカルスクールに、残りの75%がモダースクールに進学している」（226）ということから、1960年代のイギリスでは進学を目指す者は自動的に20%に限られてしまい、残りの80%は就職という進路を選ばざるを得なかった状況だと考えられる。また後藤は「いわゆる残り75%の教育を担当するモダースクールへの教育費配分は、常にあとまわしにされ、施設・設備、教員の質なども、しばしば問題とされるほど劣っていた。この中で生徒は、11歳試験の敗北感と不十分な教育環境で、義務教育を終えなければならなかった」（226）とも述べており、1960年代において進学する人は中産階級の学生が多い一方で、就職する人は労働者階級の学生が多いということを考慮すると、当時の教育制度が結果的に階級格差を生み出してしまっているために、公教育にふさわしくないものと考えられ、**Comprehensive school** の設立と増加が起きたと考えられる。

また1988年 **Thatcherism** の一環でイギリス元首相の **Thatcher** が行った教育改革においては **Secondary Education** における全国カリキュラムの策定が行われたと岡山は述べており、このことから策定される前までは学校間でカリキュラムに違いがあり、学生の学力にも差があったことが伺える。**Thatcher** が行った教育改革によって学校間の差が狭まったこ

とで大学進学率が増加したのではないかと考えられる。

教育における社会的流動性の増加の要因を3つ考察したが、この3つの要因から考えられることは、イギリスにおける平等化の進行である。奨学金や **Comprehensive school** の増加のことを考慮すると、イギリスは階級に関係なく大学進学が可能な基盤を築くことが出来たといえるだろう。階級に関係なく進路を学生に与えるという点で、現代のイギリスの教育制度はあらゆる人々にとって平等になりつつあると考えられる。

本節においては教育における社会的流動性を大学進学率から調査し、現代のイギリスの教育における社会的流動性は大学進学率の増加から流動性が高くなっているという結果が得られた。この大学進学率の増加の要因は3つあると考えられ、1つ目の要因は大学の数の増加、2つ目は潤沢な奨学金制度、3つめは **Secondary Education** の整備である。特に奨学金制度や **Secondary Education** の整備は生徒たちが階級を気にせず、進路を選択するための要素となっていることを考慮すると、教育の平等化が進んでいると言える。

2-3 職における社会的流動性と中産階級の増加から見るイギリス社会

前節においては、教育における社会的流動性が高くなっている事を大学に進学する生徒数の増加から確認し、この流動性の上昇が中産階級の増加を導き、また奨学金や **Secondary Education** の整備が行われたことにより、1950年から1970年代と比較して進学するうえで階級を気にする必要が無くなったことから、教育が平等化されつつあることを論じた。本節においては、第1節で確認したように、階級と職は強い関係性を持ち合わせている事から、職における社会的流動性を調査したうえで、現在のイギリス社会の状況がどのようなになっているかを論じていく。

前節で確認したように、教育と職には強い関係性があり、義務教育を終えてそのまま就職した人と大学を卒業して就職した人とでは選択できる職業の種類に大きな差が生じている。第2節で説明したように **NVQs** という職業資格試験で高い得点を取得すれば、学歴に関係なくキャリアアップを狙うことが可能だが、**NVQs** の問題内容は義務教育終了レベルから大学院卒業レベルまでの広範囲に及んでいるため自主的な学習のみでキャリアアップを狙うことは非常に困難なことが伺える。この事からも教育と職業は密接につながっていると考えられる。

まず職における社会的流動性の定義を確認していく。石川（1993）がイギリスの戸籍本署が社会階級を世帯主の職業によって7つに分類していると述べており、その内容は以下のようになっている。

表1 社会階級を考慮した職業の分類

階級	職種
社会階級 I	専門職
同 II	中間職

同	ⅢA	非筋肉労働の熟練職
同	ⅢB	筋肉労働の熟練職
同	Ⅳ	半熟練職
同	Ⅴ	非熟練職
アンダークラス		経済活動に携わっていない者

(出典 石川 (1993) , P41)

この表における専門職とは科学者や弁護士などを指し、中間職は外交官、事業経営者、非筋肉労働の熟練者はレストラン経営者、不動産業者など、筋肉労働の熟練職はバス運転手、すべてのスポーツ選手など、半熟練職は農場労働者、救急隊員などのことを指し、非熟練職はビル掃除人、土木作業員などの事を指している。また経済活動に携わっていない者とは上記で示した 6 つの階級にいずれにも属していない人々のことを指し、この階級に属する人々は職業も日雇い労働が主で、職が固定されていない。このように職業を社会階級で分類すると 7 つに分かれることが明らかになった。

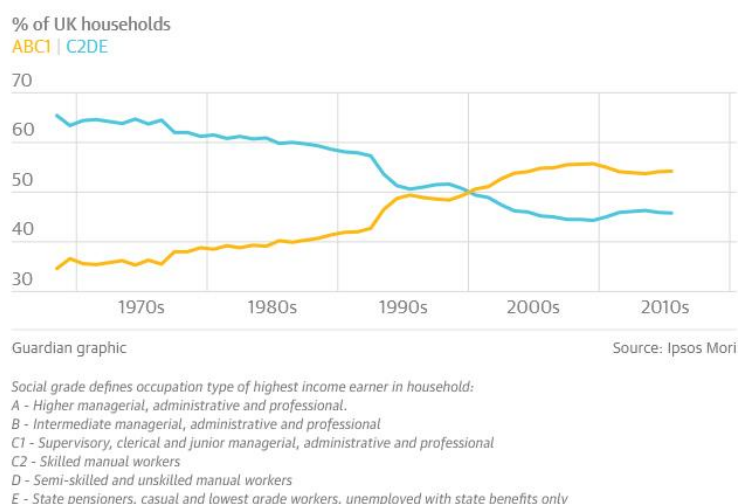
この 7 つの階級の内、流動性を考える上で重要となる階級の境界線は非筋肉労働の熟練職と筋肉労働の熟練職に存在すると考えられる。前節の図 1 で確認したように、大学卒業時点でのレベルは技術職や下級管理職と同等である一方で、義務教育を終えてそのまま就職した人々のレベルは熟練工や工芸職などの職種と同等であり、この事から中産階級と労働者階級の境界線が非筋肉労働の熟練職と筋肉労働の熟練職の間に存在することが分かる。つまり職における社会的流動性が高くなる場合とは筋肉労働の熟練職に就いていた人々が非筋肉労働の熟練職に就いた場合と非筋肉労働の熟練職に就いていた人が筋肉労働の熟練職に就いた場合の 2 通りになると考えられる。

Sutton Trust(2017)の調査では、2004 年時点で職業における社会階級の向上が 1976 年と比較して起こらなくなったということが示唆されており、この事から現代では良い職業に就いて階級を向上させることが難しくなっていることが伺える。現代においては、大学に進学する人が増加している事から、階級を向上させる人々が増加すると考えられるが、なぜ階級の上昇が起きなくなったのだろうか。

階級の上昇が起こらなくなった原因として中産階級の人々の増加が考えられる。表 2 はイギリスの中産階級と労働者階級の分布を年代ごとに職業の観点から表したものであり、ABC1 が中産階級のことを指し、C2DE が労働者階級のことを指している。表 2 によれば、1970 年代は圧倒的に労働者階級が中産階級と比較して多かったのに対し、2010 年代になると、中産階級が労働者階級よりも多いという結果になっているということから、中産階級が増加したことが伺える。この中産階級の上昇で重要な年代は 1990 年代であり、表 2 によれば、グラフにおいて 1990 年代で中産階級が急激に上昇しているのが見受けられるが、これは前節で説明した大学数の増加と Secondary Education の整備が関わっていると考えられる。大学数の増加と Secondary Education の整備により、大学に進学する人々が増加し、

就ける職種の幅が広まったことから階級の上昇が起こったと考えられるが、表 2 によれば 2000 年代になると徐々に階級の上昇が起こらなくなり、2010 年代に入ると階級は停滞するようになったことが伺える。人々の階級が年を経るにつれて停滞するようになった原因は人々の階級が上がり切ったことだと考えられる。労働者階級に属する人々が 1970 年代には 65%いたのに対し、2010 年代には 45%に減少し、一方で中産階級は 35%から 55 パーセントへ増加していることから、20%が中産階級への上昇を果たしたと考えることができるが、これは逆に労働者階級に属する人々が減少したとも考えることができる。労働者階級に属する人々が少なくなれば、必然的に階級上昇を行う人々も減少してしまうため、それに伴って社会的流動性が減少してしまうのである。また Sutton Trust(2017)の調査では、過去と比較して現代においては質の良い職が創出することが出来ないということが示唆されており、この事から残りの 45 パーセントの労働者階級が中産階級に上昇していない理由としてはそもそも質の良い職に就くことが出来ず、中産階級への上昇が難しいことが影響していると考えられる。

表 2 職から判断する中産階級と労働者階級の年代分布



(出典 The Guardian 原典 Ipsos Mori)

イギリスの人々の中産階級化が進む中で、イギリスが中産階級主体の社会になってきているということから、中産階級の意向が世間に反映されやすいと考えられる。例えば、新井 (2001) によれば、中産階級に支持されている保守党の党首が 1950 年代までは上流階級に属している人だったのに対して、1960 年代半ばからは中産階級出身の人が党首になり、この傾向が今現在まで続いているということから、中産階級が増加した現在においては、中産階級の意見が政治内において反映されやすいと考えられる。

本節では、イギリスの職における社会的流動性から中産階級に属する人々が増加し、これによってイギリス社会で中産階級が大きな影響力を持つようになったことを論じた。職

における社会的流動性が下がっていることが低下していることが先行研究において指摘されていたが、これはむしろ中産階級に属する人々が増加したことの証明であり、また労働者階級の人々が減少したことの証明でもある。中産階級が増加したことによってイギリスの中産階級化が進み、中産階級がイギリス社会において大きな影響力を持つようになったと考えられる。

2-4 イギリス人の地域発音に対する評価から見る標準発音の要素

前節では職における社会的流動性と中産階級の増加から、中産階級主体の社会になってきていることを明らかにした。本節では第2節と第3節で得られたイギリスの階級変動の現状を踏まえたうえで、現在のイギリスの人々の地域発音に対する評価を明らかにし、標準発音に必要な要素を考察していく。

イギリスの中産階級化が進んでいるということを踏まえたうえで、現在イギリスに多く存在する英語の発音に対するイギリス人の評価を調査していく。教育における平等化も進んだことを考慮すると、地域発音に対する評価も変化していると考えられるため、イギリス人の評価を調査することは重要だと考えられる。

表3は2013年にLondonに拠点を置く市場調査会社であるComResによって行われたもので対象者はイギリスに住む18歳以上の人々でおよそ4000人を対象に行われたものである。どのアクセントが知的なのかという問いに対し、RPと答えた人が一番多く、EdinburghがRPの次に続いていた。上記の結果から分かることはRPが今でも人々の中で知的な発音と考えられているということだ。一方で話者に労働者階級が多いCockneyやLiverpool訛りが下位に位置していることから、現在も発音と階級はかかわっていることが分かる。また人々に教養が低いと考えられている地域はLiverpoolやLondon、Belfastといった工業都市圏であり、一方で教養が比較的高いと考えられているEdinburghやDevonは工業都市ではなく学業都市であるということから、発音と地域に深い関係性があることが伺える。ジョン・ハニー(2003)は、イギリスで最も軽蔑されている発音は大工業都市圏の労働者階級と密接に結び付いた発音であり、これらの発音を話す人々は自らの発音を変えない限り、豊かな教養の持ち主だと認めてもらえないと述べているが、表3からも労働者階級の発音に対する偏見が見受けられることから、教養の高さを示すうえで扱う発音が重要になることは明らかである。

表 3 頭がよさそうに見える発音とは

	Very intelligent	Fairly intelligent	Neither intelligent nor unintelligent	Not very intelligent	Not all intelligent	Don't know	NET: Intelligent	NET: Unintelligent
Received Pronunciation / Queen's English	31%	32%	27%	2%	1%	7%	62%	3%
Edinburgh	8%	30%	44%	7%	2%	9%	38%	9%
Devon	5%	23%	46%	12%	3%	10%	28%	15%
Belfast	4%	19%	48%	14%	5%	10%	23%	19%
Cardiff	4%	19%	52%	12%	4%	9%	23%	16%
Manchester	4%	16%	50%	17%	5%	8%	20%	22%
Newcastle	4%	15%	48%	19%	7%	9%	19%	26%
London (Cockney)	3%	14%	43%	25%	7%	7%	18%	32%
Birmingham	3%	12%	44%	22%	11%	8%	15%	33%
Liverpool	3%	12%	40%	24%	13%	8%	15%	37%

(出典 itv 原典 ComRes)

表 4 も同じく ComRes によって行われたアンケートでどの発音が親近感を持てるのかと
いうことを調査したものである。結果は、表 1 とは異なり RP は下位に位置する一方で、
Cockney や Liverpool の訛り、その他の様々な発音が上位に位置している事から、RP が身
近に感じられる機会が少ないことが分かる。身近に感じられる機会が少ないことは RP の話
者数が少ないことに起因していると考えられる。表 3 と表 4 の結果から RP は知的だと考
えられている一方で、人々の身近には存在しない発音だということが分かった。前章で説
明したように RP の話者は非常に少ないことが表 4 から伺うことが可能であり、話者数の
少なさが現在の RP の考え方の変化を招いている事から、親近感を感じることができるとい
うのは標準発音を考えるうえで重要だと考えられる。

表 4 親しみのある発音とは

	Very friendly	Fairly friendly	Neither friendly nor unfriendly	Not very friendly	Not at all friendly	Don't know	NET: Friendly	NET: Unfriendly
Devon	21%	44%	24%	3%	1%	8%	65%	4%
Newcastle	19%	38%	26%	9%	4%	5%	56%	13%
Edinburgh	14%	38%	28%	11%	3%	5%	51%	15%
Cardiff	13%	38%	30%	9%	4%	6%	51%	13%
London (Cockney)	13%	36%	29%	14%	6%	3%	49%	19%
Liverpool	12%	31%	28%	16%	9%	4%	42%	26%
Belfast	10%	30%	29%	16%	8%	7%	41%	24%
Received Pronunciation / Queen's English	11%	27%	35%	17%	7%	4%	38%	23%
Manchester	9%	29%	36%	17%	4%	5%	38%	21%
Birmingham	8%	28%	37%	15%	6%	5%	37%	21%

(出典 itv 原典 ComRes)

表 5 から現代のイギリスにおいても地域発音に対する偏見が存在することが伺える一方
で、No と答える人が Yes よりも圧倒的に多いことから、地域発音に対する偏見から来る差
別は頻繁に行われているわけではないことが伺える。第 2 節で教育が平等化してきている
事を論じたが、このような差別が頻繁に起こらなくなったのは義務教育の整備が関わって

いると考えられる。総合中学校の増加が義務教育における階級間の隔たりを無くすためであることを第2節で説明したが、この教育改革によって階級意識を取り払おうとした結果、人々に平等意識が生まれたと考えられる。

表5 地域発音が原因で差別されたと感じることはあったか

	Yes	No	Don't know
In a social situation	20%	75%	5%
In the workplace	14%	82%	4%
When being served in shops or restaurants	13%	82%	5%
In job interviews	12%	81%	7%
Any discrimination (NET)	28%	-	-

(出典 itv 原典 ComRes)

本節では、イギリスの人々の地域発音に対する評価を明らかにしたうえで、標準発音に必要な要素を考察していった。表3では、発音における教養の高さは話者の階級のみならず話されている地域とも関係性があることが判明し、表4から、親近感を感じることは標準発音における重要な要素であることが伺える。また表5において、教育改革によって人々に平等意識が生まれたために地域発音に対する偏見も抑えられつつあると考え、階級を意識させないことが現代の標準発音に求められていると考えた。

本章では、イギリスにおける社会的流動性からイギリス社会の状況を把握し、そこから今現在標準発音に必要な要素は何なのかを検討していった。第2節においては、イギリスの教育が1950年代から比較して、大学進学率や義務教育の整備という観点から平等化しつつあることを明らかにした。教育における平等化は児童の考え方に大きな影響を与えると考えられ、理由としては幼少期や青年期に培った経験や考えは自分たちの将来の考え方に反映されることが挙げられる。幼少期から青年期にかけて階級を気にしなくなることにより、人々は階級にさほど固執しなくなると考えられる。また第3節においては、職における社会的流動性が1960年代と比較して停滞していることを確認したうえで、この停滞は中産階級の増加が原因であり、現代においてイギリスの社会が中産階級主体になってきていることを明らかにした。イギリスの中産階級が増加したのは労働者階級の人々が階級の向上を果たしたからであり、現代においては中産階級の人々が多く、労働者階級の人々が少ないことから、必然的に、階級向上を果たす人の数が減少し、職の数も少なくなっていることから職における社会的流動性が下がったと考えられる。第4節においては、第2節で確認した教育の平等化、第3節で確認したイギリス社会の中産階級化を踏まえて、現代の標準発音に必要な要素を明らかにしていった。現代のイギリスにおいては、平等主義が広まった影響で地域発音に対する差別が以前と比較して行われなくなったと考えられる。また

中産階級化が進む中で、依然として教養の高さという観点から見た RP の評価は高かったが、一方で親近感という点では地域発音より劣るということで、身近には RP を話す人が居ないことが伺える。次章においては、本章で得られた現代の標準発音に必要な要素と卒論の主題である EE を比較したうえで、標準発音として妥当かどうかを検討していく。

3 RPに代わる新標準発音とは

本章では、標準発音に必要な要素と EE の特徴から標準発音としての EE の可能性が存在するかを特徴の面から考察し、もし仮に EE が標準発音になるということはイギリス全体で EE という発音が認知されている状況になると考えられることから、EE が出身地域を超えて、拡大しているかどうかを明らかにしたうえで、この発音がイギリスの標準発音になる可能性を持っているかどうかを地理的な面から明らかにしていく。

3-1 EE と標準発音に必要な要素から見る EE の特性

第2章で得られた現代における標準発音に必要な要素を EE の特徴と比較して、EE が標準発音になる可能性が存在するか検討していく。RP の代わりとして学者たちが標準発音に挙げている発音の1つが EE であり、このことから EE には他の発音には存在しない特徴が存在すると考えられる。

EE と呼ばれる理由について確認していく。Estuary English の Estuary とは河口のことを指し、日本語では河口域英語と呼ばれているが、言語学者の David Rosewarne (1994)は、EE はテムズ川周辺の County である Greater London や Essex、Kent など多く用いられていることから河口域英語と呼ばれていると述べている。County とは日本で言うところの州を指し、Essex や Kent のような County は工業が盛んというよりはむしろ農業や田舎に近い County であることから、工業が盛んな County と比較して使用する発音が高い評価を受ける傾向にあると考えられる。

また Rosewarne (1994)は、若い人々が高齢者の方と比較して EE を話す傾向にあり、この背景としては総合中学校においては少数の RP を話す生徒と多数の地域発音を話す生徒が混ざり合うことにより学校を卒業するまでに生徒の発音が EE になり、私立学校に通う生徒の場合は RP を話す生徒が多く存在する一方で、一部は地域発音を使用している事から卒業する頃に発音が EE に発音が変化すると述べており、この事から EE はどこからでも起こり得る発音であり、RP のように学習に時間をかけなくとも自然と身につく発音であることが伺える。また 1990 年代は前章で説明したように大学の進学率が急上昇し、平等な義務教育を行うための総合中学校の増築が行われていた頃ということから平等主義が生まれたが、この平等主義もまた生徒が EE を使用する理由になっていると考えられる。

Rosewarne (1983)は、EE は RP と地方発音が結合した結果生まれた発音であると述べているが、これが平等主義につながっていると考えられる。RP には RP 特有の発音があり、一方で地方発音にも RP と同様に特有の発音が存在する事から、この特有な発音から人々は発音の種類を判断していると考えられる。しかし、EE は RP と地方発音が結合した発音であることから、どのような種類の発音なのかを聞いただけでは人々は判断することが出来ないために発音から階級が判断されることがないということが言える。ここから EE は階級を感じさせないという点において平等な発音だと考えることができる。つまり平等主義が生まれつつある現代において、EE は都合のよい発音だと言える。

また **EE** は地方発音を持ち合わせているということで話し相手に親近感を持たせることができる。前章で説明したように **RP** には話者数が極端に少ないために身近に話す人が存在しないということから親近感を感じ取ることが出来ないというデメリットが存在する一方で、地方発音においては身近に話す人が存在するという点で親近感を相手に与えやすいことから、**EE** は教養の高さと親近感を話し相手に示すことが可能だと言える。

本節においては第 2 章で得られた現代における標準発音に必要な要素から **EE** が標準発音になることは妥当かどうかを検討していった。話されている地域においては、田舎の地域で話されている事から工業地域と比較して評価は高い方だと考えられる。また若い人々が **EE** の話者になっているという点で、これは義務教育を受ける中で、様々な人と接することで自然と地域発音と **RP** が重なり合ったということから、平等化が進む義務教育の影響を受けていると考えられる。そして **EE** は **RP** の発音と地域発音を結合した発音であることから、親近感を話し相手に与えることができるという点で、特徴の面においては **EE** には標準発音になる可能性が存在すると考えられる。第 2 節においては、**EE** の発音は他の発音と比較して階級がばれないという点で特有であると言えることから、発音を詳しく分析したうえで、階級がどのようにぼやかされているかを明らかにしていく。

3-2 **EE** の発音と階級

前節では、**EE** の特徴と標準発音に必要な要素を比較していき、特徴の面において **EE** が標準発音になる可能性があることを確認した。本節では、**EE** 特有の階級を感じさせない発音を分析したうえで、階級がどのようにぼやかされているかを明らかにしていく。**EE** は南東部イングランドの地方発音と強い関係性があり、南東部の地方発音には労働者階級の発音が多く存在する事から、**RP** と労働者階級の発音をまずは確認していく。

一概に発音といっても種類は様々であるが、その中でも **Estuary English** を説明するうえで大事となる発音が 5 つ存在する。この 5 つの発音は **Cockney** や **RP** にも表れる発音であり、**EE** において、どのようにこの 5 つの発音が出現するのかを明かすうえで、重要だと考えられるため、まずはこの 5 つの発音を調査する。

まず一つ目に **Th-fronting** という発音についてであるが、ここの **Th** とは英語の発音のことを指す。/θ/ の音が最初に来た場合、読み方が /f/ に変化するという発音で、例としては **think** が挙げられる。**think** の場合、「スィンク」と読むのが「フィンク」となる。**Maren Kristine Haugom (2012)** によれば、**Th-fronting** は **Cockney** の発音でありながら、**London** のみに留まらず、様々な地域の発音にも溶け込んでいるということから、地域の人々にとってはフレンドリーな発音であることが伺える。また **Cockney** の発音ということで労働者階級の人々の使用頻度が高い。一方で **RP** の使用者の間ではほとんど出てこないことから訛りの強さとはこのような発音の頻度で決まることが分かる。

T-glottalling という発音について、この発音は **T-glottal stop** とも呼ばれている。**Glottal-stop** とは日本語で声門閉鎖音のことを指し、つまり **T-glottal stop** とは **T** を発音し

ない発音のことを指すのである。この発音が起こる場合は人それぞれで異なっているが、それでも労働者階級が RP の話者よりも頻度が多いことが分かっている。また Th-fronting と異なっている部分として、この訛りは RP にも起こりうるということである。RP にも Cockney にも出現するこの発音は階級をぼやかす発音ということができないのではないだろうか。

YOD-coalescence という発音について、/j/の発音が/j/に変化する発音のことを指す。例えば、Tutorial の Tuto は「チュート」と読むが、この発音の場合だと、「テュート」と読む。この発音も RP や他の発音で起こるものであることから、階級をぼやかすうえで重要な発音であると考えられる。

L vocalization は/l/の発音を /ʌ/に置き換えるという発音のことを指し、例としては milk が挙げられる。milk は通常は「ミルク」と発音するが、L vocalization の場合は「ミック」と読む。Cockney の典型的な発音である。この訛りは Cockney に出てくるように、RP の話者に好まれるような発音ではなかったが、今 RP の話者にもこれと似た発音をする人々が現れており、RP が今現在も変化していることが伺える。RP の話者で話す例として挙げられるのが元イギリス首相の Tony Blair である。

そして最後に挙げるのが H-dropping という発音である。H-dropping とは語頭が H の単語の H の部分を読まないという発音のことを指しており、これは Cockney の代表的な発音の 1 つであるが、この発音も T-glottaling と同じく Cockney のみならず様々な発音に組み込まれており、イギリス中に広がっていることが伺える。例としては happen の場合、通常、「ハプン」と読むのが、この訛りにおいては「アプン」となる。この発音は Cockney を始めに、労働者階級の人々が使用する言葉であることから、社会階級の下層部に位置する発音だと考えられており、評価としては非常に低い位置に存在する発音である。

表 6 社会階級による H-dropping の頻度の違い

social class	H-dropping
upper middle	12%
lower middle	28%
upper working	67%
middle working	89%
lower working	93%

(出典 : Malcolm Petyt (1985), P107)

表 6 から分かるように労働者階級の人々が H-dropping の話者の大半を占めており、中産階級になると極端に話者数が減っていることから、労働者階級の訛りであるということが伺える。また表から判断するに、上流階級になるとほとんど H-dropping は話されていないと考えられることから、RP の話者の殆どがこの訛りを話しているとは考えられない。

では EE の発音について確認していく。EE の発音は RP と地域発音が組み合わさって成立したことを前節で確認したが、この地域発音とは南東イングランドの発音のことを指す。この南東イングランドの地域発音については Rosewarne(1984)が “On the level of individual sounds, or phonemes, "Estuary English" is a mixture of "London" and General RP forms.” (2) と言っている部分があることから南東イングランドの中でも London の発音のことを指していると考えられる。また音声学者である John Wells(1997) が「EE は新しい発音であるが、新しい現象ではない。評価の高い London の発音が地理的に、そして社会的に分布していく事は 500 年以上も続く傾向である。しかし、社会階級の考え方が浸透し、社会的流動性が大きくなった現在において、以前にも増してこの傾向が強くみられるようになった」(3) と述べていることから、London の発音を地理的に、社会的に広めていくために様々な発音が生まれたのであり EE の階級をぼやかすという考え方も昔から存在しており、社会的流動性が大きくなっている現代だからこそ、EE が注目されている事が伺える。では本節の主題である実際に階級をぼやかすとはどういうことなのかを EE の発音を RP や London の代表的な発音である Cockney との比較を行い、明らかにしていく。

まずここでは RP と EE が共通して持つ発音と Cockney の発音を比較していく。表 7 から分かるのは H-dropping が RP と同様に存在しないことが挙げられる。第 3 章第 1 節で説明したように、H-dropping は階級が上がっていくにつれ会話に出現しなくなってくる。逆に言えば、階級が下がれば下がるほど会話に出現するという点で、労働者階級の発音だと考えることができるが、この発音が存在しないということから EE は労働者階級ではなく、中産階級に位置する発音であると考えることができる。また Th-fronting についても同じことを言うことができる。この発音も RP にはほとんど出現せず、一方で Cockney にはよく出現するということから EE が労働者階級の発音ではないことが伺える。また no intervocalic T-glottaling について、この発音は [t の発音が母音に挟まれた場合に、[t] の発音が失われるというものであり、例として挙げられている pity は [piti] という発音から [t] が失われて [pi?i] という発音になったものである。T-glottaling は RP の話者にも見られると説明したが、T-glottaling には種類が存在し、RP においては会話に出現する T-glottaling の数が Cockney よりも少ないことが伺える。また Rosewarne (1984) によれば “Non-Londoners often comment on what they see as the jerkiness of the speech of the capital. This is because of the use of a glottal stop in the place of the t or d found in RP, as in the stage Cockney phrase” (2) と述べているように、T-glottaling は Cockney にも同様の発音が存在するということから、RP にも存在する発音であるとはいえ、London 以外の地域に住む人々からは良い印象を受けていない。このことから地理的に EE が広まるには、RP と同様に、会話に出現する T-glottaling の種類の数が少ないことが条件になると考えられる。

表 7 RP/EE の発音と Cockney の発音の違い

Estuary English/RP	Cockney
no H-dropping	H-dropping, e.g. hand [ænd]
no TH-fronting	TH-fronting, e.g. think [fɪnk]
no MOUTH-monophthong	MOUTH-monophthong, e.g. town [te:n]
no intervocalic T-glottaling	intervocalic T-glottaling, e.g. pity [/pi?i]

(出典 Raymond Hickey (2007), P5)

次に Cockney と EE の共通した発音と RP の発音を比較していく。表 8 から理解できることは final T-glottaling の存在である。RP には存在しない一方で、Cockney には存在するということからこの発音は労働者階級側の発音であると考えられる。本節で確認したように、L-vocalization も労働者階級の発音であり、Estuary English には Cockney 程ではないものの L-vocalization が存在するという点から、RP と比較して、労働者階級の発音が多く存在していることが分かる。

表 8 Cockney/EE の発音と RP の発音の違い

Estuary English/Cockney	RP
variable HAPPY-tensing, e.g. pretty [pɹɪti]	no HAPPY-tensing
vocalisation of preconsonantal, final //, e.g. spilt [spiut]	no vocalisation of preconsonantal
final T-glottaling, e.g. cut [kv?]	no final T-glottaling
yod coalescence in stressed syllables, e.g. tune [tʃu:n]	no yod coalescence in stressed syllables
some diphthong shift in FACE, PRICE, GOAT, e.g. [fæis], [pr>is], [gvot]	no such diphthong

(出典 Raymond Hickey (2007), P6)

YOD-coalescence について、第 1 節で RP にも出現すると説明したが、上述のように発音の対象となる部分が強調される場合には、YOD-coalescence は出現しなくなるなど、非常に厳格なルールの下で RP が存在していることが分かる。

これらの発音以外にも HAPPY-tensing という発音の強弱を示すものがある。音声学者である John Wells (1997)は“HAPPY-tensing, using a sound more similar to the [h9] of beat

than to the [H] of bit at the end of words like happy, coffee, valley.” (2)と述べている。ここでの[h9]や[h]とは発音の強弱を指し、HAPPY-tensing は happy や valley などの最後の発音が[i]となる場合に、発音を強くするというものである。また diphthong shift という発音は、単母音を二重母音にする発音のことを指す。表 8 には “some diphthong shift” とあることからあらゆる場合に diphthong shift が起きるわけではないものの、Cockney のように発音する場合も存在する。

EE の発音を、RP との共通点、Cockney との共通点と分けて比較していったが、ここから明らかになったことは、EE の発音は RP と地方発音が等しく分かれているということである。RP と Cockney の発音方法には一部重複がみられるが、人々が話者の階級を認識できてしまうのはその階級特有の発音の出現頻度が高いからだと考えられる。例えば、労働者階級の発音には H-dropping が多く出現する。EE においては RP 特有の発音と地域発音が等しく混ざっている事から、特有の発音から階級を判断できないと考えられる。階級が感じられないという特徴から、人々の階級意識が変化しつつある現代のイギリスにおいて EE は理想的な発音だと考えられるが、テムズ川流域のみで留まっていたは人々から認識されないことから、標準発音になることはないと考えられてしまうため、次節においては 1984 年に出現したこの発音が現代までにどれほどの広がりを見せているのかを明らかにしたうえで、今後も広がり続けていくかどうかを検討し、標準発音になる可能性が存在するか判断していく。

3-3 EE の拡大から見る標準発音の可能性

前節においては、階級をぼやかす発音である EE がどのように階級をぼやかしているのかを発音の面から検証し、EE には労働者階級特有の発音と RP の特有の発音が混在している事から話し方から階級を判断することが出来ないという結果が得られた。本節においては、この EE が 1984 年から現在までどのような広がりを見せ、またなぜ広がっているのかを明らかにしたうえで、地理的な面において EE が標準発音になる可能性が存在するかを検討していく。

まず EE の広がりについてであるが、第 1 節において EE はテムズ川周辺に現れた発音であり、地理的に言えばテムズ川周辺で多く使われる発音であることを確認したが、EE はテムズ川周辺のみならず、イングランドの様々な地域で使われるようになりつつある。言語学者の Paul Coggle (1993) は「北部に住む若い人々の英語の発音に Estuary English の特徴が見受けられることを示唆する証拠が存在する。その証拠とは、Birmingham や Derby、Leicester のような都市では EE が一般的でない一方で、Norwich や Southampton のような競争力の少ない都市においては EE を話す人が比較的多いということである」(27) と述べているように、EE は北部の町である Norwich や Southampton でも見受けられることが伺える。またこの北部へ範囲が拡大したことに対し言語学者である Ulrike Altendorf (2003) も “some characteristics of EE have spread on even further north, in particular to

Liverpool and Glasgow” (16)と述べている。また Altendorf は EE の拡大を地理的に次の 4 つに分割した：1)-The Thames-Estuary hypothesis 2)-The Home-Counties hypothesis 3)-The South-of-England hypothesis 4)-The plus-Liverpool-Plus-Glasgow hypothesis この 4 つの分類を用いて、Rosewarne、Coggle、Wells の 3 人の学者の考えとメディアの情報から EE の拡大を Altendorf が調査してみたところ、表 9 のような結果が得られた。

表 9 において、+ は EE の存在がみられることを示しており、0 とは存在の有無を表すには十分なデータがそろっていないことを示している。表 9 から分かるように、Liverpool や Glasgow といった地域にまで EE は拡大しており、また 1990 年代において Liverpool などの地域について言語学者から言及されていないということから、EE は拡大を続けていることが考えられる。地域発音にも関わらず、EE は出身地域であるイングランドだけで話されているのではなく、Scotland でも話されていることから、EE は標準発音になる可能性があると考えられる。

stage of development	Hypothesis	Rosewarne 1984,1994	Coggle 1993	Wells 1998	Media
1st stage	Thames-Estuary hypothesis	+	+	+	+
2nd stage	Home-Counties hypothesis	+	+	+	+
3rd stage	South-of-England hypothesis	Rosewarne 1994	Individual features	0	0
4th stage	Plus-Liverpool-plus-Glasgow hypothesis	0	0	0	+

表 9 Rosewarne、Coggle、Wells、メディアから見る EE の拡大
(出典 Altendorf (2003), P11)

また EE は上述のように範囲を拡大させるだけにとどまらず、その影響力も拡大させつつある。その影響力はメディアや言語学者のみならず、政府の機関にも及ぶようになっており、言語学者の Przedlacka(2002)が “it has even received official condemnation from the Secretary of State for Education as a form of English which should be disallowed to be taught at schools” (4) が述べているように、EE は学校教育において教えるべきではないという批判が外務大臣から寄せられるほどにまで影響力を高めている。またこの批判の理由として、外務大臣は政治的立場にあり、RP を用いる機会が多いことから、EE が RP に大きな影響を与えることを恐れていたことが考えられる。一方で、Rosewarne(1994)が “Tony Banks, M.P, interviewed on the B.B.C Radio programme ‘Word Of Mouth’ on 29 June 1993 reported that Estuary English is now spoken by Conservative members of

Parliament as well as Labour”(4)と述べているように、外務大臣と同じ政治的立場にありながら EE を話す人々も存在している事から、EE が影響力を高めていることは明白である。

EE が影響力を高めている理由として、地域発音が人々に受け入れられるようになってきているという状況が挙げられる。言語学者の David Ward(2000)はイギリスの大手新聞社の The Guardian において、Liverpool の発音が友好的に見られるようになり、特徴ある発音の仕方がビジネスにおける障壁と考えられなくなったと述べているが、ここから分かることは労働者階級の発音も過去とは違い、受け入れられるようになってきているということである。Liverpool は労働者階級が集まる工業都市であり、そこでは主に Scouse と呼ばれる発音が話されており、以前は労働者階級の発音ということで蔑まされている発音の 1 つであったが、現在ではビジネスにおいても用いることが可能となっている事から人々は発音に対して寛容になっていると言える。このような状況があるからこそ、地域発音という立場にある EE が現在注目され、影響力を高めているのではないだろうか。

また職の社会的流動性の低下も EE の影響力が高まった理由として挙げられる。EE が生まれた 1984 年と現在の社会的流動性を比較すると、1984 年の方が現在よりも流動性が高い。1984 年当時は多くの職が生み出され、人々は十分に職に就くチャンスが与えられていたが、時代が進むにつれ、中産階級に階級を上げる人々が増加し、中産階級が主に就く職業に人々が殺到してしまったために、良い職業に就いて階級を上げることが難しくなっているという状況が影響していると考えられる。このような状況下で、職で階級を上げようとする場合、高等教育を受けることや、住んでいる環境によっては自らの地域発音を変えることが必要だと考えられる。特に過去のように極端ではないとはいえ、現在も話す発音が今後就くであろう職に大きく影響を与えている事から、EE がこの場合に役に立つと考えられる。前節で述べたように EE は RP と Cockney の発音を共有している事から、RP のように高貴というイメージを保ちつつ、Cockney のように親近感が感じられるという評価を受けるため、ビジネスなどの場において扱いやすい発音であると言える。

EE はビジネスの場面のみならず、親近感を感じられるという点で友人や知人と話す際にも気軽に用いることができると考えられる。カジュアルな場面やフォーマルな場面に左右されることなく扱うことができる EE の有用性が出身地域を超えて EE を拡大させていると考えられる。

本節においては、EE の範囲と影響力の拡大を主題に、その理由などを考えていった。EE の拡大はイングランド南部から北部にまで及んでおり、その理由として主に現在のイギリスの労働状況や人々の地域発音に対する態度の変化が影響していることが挙げられる。EE は他の地域発音と違って、出身地域を超えて話されており、今後も EE の拡大は続くと考えられる事から地理的な面において EE には標準発音になる可能性が存在すると考えられる。

本章では、EE の階級をぼやかすという性質の実態と拡大を続ける理由を考えていった。第 1 節では第 2 章で得られた標準発音に必要な要素と EE の特徴を比較していき、標準発音になる可能性が存在する事を明らかにした。第 2 節では EE の階級をぼやかすという性

質はその発音から来るものとされており、RP 特有の発音と Cockney 特有の発音が EE の中に混在している事で、階級が話し方からは判断できないということが明らかになった。第 3 節においては、EE の拡大はイングランド北部にまで及んでおり、拡大が地域発音にもかわらずここまで及んでいる理由として、人々の発音に対する態度や職における社会的流動性の低下から職に就くために RP と Cockney の評価を併せ持つ EE が有用であると考え、EE は今後も拡大していくと考えられる。EE は階級をぼやかすという特徴を持っており、この特徴は階級意識が変化するイギリスにおいて有用であり、またテムズ川流域のみならず様々な地域に拡大している事から、EE には標準発音になる可能性がある結論付けた。

終章

イギリスには **Received Pronunciation (RP)** と呼ばれる発音が存在する。この発音はイギリスにおける標準発音とされており、話者は社会的に高い評価を受けることができる。社会的に評価が高いということから **RP** を話すことで自分の評価を上げようとした人も存在し、例えば、イギリスのサッカー選手だった **David Beckham** は自らの発音を矯正することで人々から高い評価を得ようと試みたのである。このようにイギリスでは人々が発する発音も階級判断における重要な指標となっているのである。

RP に対する高評価は未だに続いているものの、一方で話者の多くが上流階級や上層中産階級に所属している事から、話す人が極端に少なく、現代のイギリスにおいても **RP** を話せる人々の割合は全人口の 2 パーセント程度という現状から、**RP** が標準発音であるという事実疑問を投げかける人が増加している。上述の疑問には **RP** が標準発音でないとするなら新たな標準発音は何かという疑問も一緒に考えないといけないのだが、この新たな標準発音は何かという疑問に対する答えの 1 つとして **EE** という発音を挙げる人々が現れ始めた。**EE** とは 1984 年に言語学者の **Rosewarne** が提唱した比較的新しい発音であり、**England** の **Thames** 川流域周辺に出現した発音であることから日本語で河口を意味する **Estuary** という文字が使われている。本論文では **EE** には実際に学者たちが挙げているように標準発音としての可能性が存在しているのかを探ることを主題として、現代のイギリスの社会的流動性と過去の社会的流動性を比較し、**RP** の標準発音としての地位が揺らぐ要因を推察したうえで、**EE** と **RP** の相違点という観点から **EE** の標準発音としての可能性を確かめていった。

第 1 章ではイギリスの階級制度を説明したうえで、**RP** に対する過去と現在の人々の考え方の違いを論じていった。イギリスの階級制度は上流階級と中産階級と労働者階級という 3 つの階級に分かれており、この 3 つの階級の考え方は 18 世紀中頃に生まれた。これら 3 つの階級は様々な判断要素が存在し、発音は職業や教育に次いで重要であるということが明らかになった。発音という判断要素の中でも最上位の階級に位置するのが **RP** という英国を代表する発音であり、この発音はパブリックスクール内で使用されていた発音が発展したもので、上流階級が使用していたということから当時の人々の中では **RP** は大きな影響を及ぼすものだと考えられており、**BBC** などのイギリスを代表する報道機関が **RP** を使用していたことから **RP** の権威や威信が確固たるものとなっていた。しかし、現在のイギリスにおいては **BBC** において **RP** の他に、他国の発音が使用される場合が存在するなど影響力を弱めていると考えられる。このように **RP** の影響力が低下したことにより、人々が **RP** を気にしなくなったことが考えられる。成立当時は大きな影響力を持っていた事から、**RP** は人々から羨望のまなざしを受けていたが、現在においては影響力を失ってしまった事から、人々が **RP** のことをそこまで気にしなくなったということが明らかになった。

第 2 章では、階級変動の現状を調査し、そこから現在の標準発音に必要なと考えられる要素を決定した。階級変動の現状を考えるうえで、社会的流動性という指標が存在する事

を明らかにした。またこの指標は階級と関わっている事から、階級と強い関係がある教育と職のことを考える必要があると考え、教育と職の場合に分けて社会的流動性を調査したところ、教育における社会的流動性は高くなっているのに対し、職における社会的流動性は低下していることが明らかになった。教育における社会的流動性が高くなっているのは、奨学金や義務教育の整備が進んだ結果、階級を気にすることなく大学に進学できるようになっていることが要因と考えられ、ここからイギリスの教育は平等化していると考えられた。一方で、職における社会的流動性が低下しているのは中産階級の人々が増加していることが要因で、このことからイギリスが中産階級主体の社会になりつつあると考えられた。そして階級変動の現状を明らかにし、イギリスの社会の内情を考察したことを踏まえて、現在の人々の地方発音に対する評価を確認したところ、地域、身近に存在すること、平等の3つの要素が現代のイギリスにおける標準発音に必要な要素だと考えられた。

第3章では、**EE**の特徴と第2章で得られた標準発音に必要な要素の比較を行った。また標準発音は一部の地域のみならず様々な地域から標準発音であることを認識されている事から、**EE**に標準発音としての可能性が存在するならテムズ川流域にとどまらず拡大を続けていると考え、実際に拡大しているかどうかを確認した。その結果、特徴的な面と地理的な面において**EE**は標準発音になる可能性が存在すると考えられた。特徴の面においては、**EE**は階級を感じさせないという点で平等であり、地理的な面においては、拡大を続けており、テムズ川流域のみならず様々な地域で話されている事から、**EE**は標準発音の発音になる可能性が存在すると考えられた。

本論文では、**EE**の特徴と拡大から、**EE**には標準発音としての可能性が存在していること明らかにした。この影響の要因は**RP**が階級発音である一方で、**EE**は**RP**の発音と労働者階級が話す発音が互いに存在していることにより、発音で階級がばれないことに加え、身近な人々にとっても親しみやすいことが明らかになった。発音が人の素性を明かすと言われるイギリスにおいて、階級をばやかすことは平等につながると考えられる。この特徴が存在する事で**EE**は拡大を続けていると考えられることから**EE**には標準発音としての可能性が存在すると結論付ける。**EE**に標準発音になる可能性が存在する事を特徴の面と地理的な面から検討したことに本論文の意義がある。

参考文献

- 新井潤美 (2001) 『階級にとりつかれた人びと—英国ミドル・クラスの生活と意見』中公新書.
- 石川謙次郎 (1993) 『変わるイギリス変わらないイギリス』日本放送出版協会.
- 今仲昌宏 (2015) 「RP 再考」『東京成徳大学研究紀要』人文学部・応用心理学部、第 22 号、117-128.
- 岡山勇一、戸澤健次 (2001) 『サッチャーの遺産—一九九〇年代の英国に何が起こっていたのか』晃洋書房.
- 河合秀和、他 (1982) 『イギリスの生活文化事典』研究社出版.
- 後藤誠也 (1966) 「総合制中等学校(I)—イギリスにおけるエリート層選抜法批判と中等教育再編成の方向を主題に—」『鳥取大学教育学部研究報告. 教育科学.』鳥取大学教育学部、第 8 号.225-258.
- ヒュー・ウィッタカ (2003) 「イギリスの「改革」と若年雇用支援」『JILPT 資料シリーズ (No.131)』独立行政法人労働政策研究・研修機構.
- デイヴィッド・キャナダイン (2008) 『イギリスの階級社会』平田雅博、吉田正広訳、日本経済評論社.
- ジョン・ハニー (2003) 『言葉にこだわるイギリス社会』高橋作太郎、野村恵三訳、岩波書店.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (2004) 「イギリスの教育制度と職業教育」
https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2004_6/england_01.html (最終閲覧日：2018年12月12日)
- 村岡健次、川北稔 (2003) 『イギリス近代史』ミネルヴァ書房.
- 文部科学省「第 2 章 学校制度と教育内容・方法 —1. 学校制度：現状とその動き—」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad197501/hpad197501_2_042.html
(最終閲覧日：2018年12月12日)
- Altendorf,Ulrike. (2003). *Estuary English: Levelling at the interface of RP and South-Eastern British English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Arnett,George. (2016, February 26). UK became more middle class than working class in 2000, data shows. *The Guardian*.
Retrieved from
<https://www.theguardian.com/news/datablog/2016/feb/26/uk-more-middle-class-than-working-class-2000-data>
- BBC World News. (2018). About the BBC.
Retrieved from https://www.bbcworldnews-japan.com/about_us
- Boston Consulting Group, Sutton Trust. (2017). *THE STATE OF SOCIAL MOBILITY IN THE UK*. Retrieved from

- <https://www.suttontrust.com/research-paper/social-mobility-2017-summit-research/>
- Coggle, Paul. (1993). *Do You Speak Estuary?: The New Standard English*. London: Bloomsbury Publishing PLC.
- ComRes. (2013, September 24). ITV Tonight Regional Accents Survey. Retrieved from <https://www.comresglobal.com/polls/itv-tonight-regional-accents-survey-2/>
- Dahou, Sofia. & Hamlin, Jasmine. (2006). Ow Cockney is Beckham Twenty Years On? An Investigation into H-dropping and T-glottaling. *Lifespans and Styles*, 2(2), 20-27.
- Haugom, M, Kristine. (2012). *Cockney and the Queen : The importance and development of the accent known as Estuary English, Masteroppgave*. Oslo: University of Oslo.
- Hickey, Raymond. (2012). *Standards of English: Codified Varieties around the World*. Cambridge :Cambridge University Press.
- . (2007). Dartspeak and Estuary English: Advanced metropolitan speech in Ireland and England. *Tracing English through time: explorations in language variation*, 179-190.
- Ipsos Mori. (2015). National Readership Survey (NRS) Social Grade estimates by year 1968-2015. Retrieved from <https://www.ipsos.com/sites/default/files/migrations/en-uk/files/Assets/Docs/Polls/ipsos-mori-nrs-social-grade-summary.pdf>
- itv. (2013, September 25). 28% feel accent discrimination. Retrieved from <https://www.itv.com/news/story/2013-09-25/regional-accents-discrimination-friendly/>
- Luu, Chi. (2017, May 23). Does your accent make you sound smarter?. *BBC*. Retrieved from <http://www.bbc.com/capital/story/20170523-does-your-accent-make-you-sound-smarter>
- Petyt, M, Keith. (1985). *Dialect and Accent in industrial west Yorkshire*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins publishing company.
- Przedlacka, Joanna. (2001). Estuary English and RP: Some Recent Findings. *Studia Anglica Posnaniensia*, 36, 36-50.
- . (2002). *Estuary English? : sociophonetic study of teenage speech in the Home Counties*. Oxford: Peter Lang Pub Inc.

- Roach, Peter. (2004). British English: Received Pronunciation. *Journal of the International Phonetic Association*, 34(2), 239-245.
- Rosewarne, David. (1984). Estuary English: David Rosewarne describes a newly observed variety of English pronunciation. *Estuary English*. University College London, Department of Phonetics and Linguistics. 1-4.
Retrieved from <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/rosew.htm>
- . (1994). Estuary English: Tomorrow's RP?. *Estuary English*. University College London, Department of Phonetics and Linguistics. 26 November 2018, 3-8.
Retrieved from <https://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/rosew94.htm>
- The World University Rankings. (2017, December 1). The cost of studying at a university in the UK.
Retrieved from
<https://www.timeshighereducation.com/student/advice/cost-studying-university-uk#survey-answer>
- Ward, David. (2000, September 22). Scousers put the accent on success. *The Guardian*.
Retrieved from <https://www.theguardian.com/uk/2000/sep/22/davidward>
- Wells, John. (1997). What is Estuary English? *Estuary English*. University College of London, Department of Phonetics and Linguistics. 1-3.
Retrieved from <https://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/whatis.htm>